

金関丈夫

南の風

創作集



法政大学出版局

金関丈夫

南の風

〈創作集〉

法政大学出版局

著者略歴

金関丈夫（かなせき たけお）

明治30年（1897）香川県琴平に生まれる。松江中学・三高を経て、大正12年京都大学医学部解剖学科を卒業。京都大学・台北大学・九州大学を経て帝塚山大学教授となり、昭和54年退官。考古学・人類学・民族学を専攻。

「南島の人類学的研究の開拓と弥生時代人研究の業績」により昭和53年度朝日賞受賞。

著書に『日本民族の起源』『南方文化誌』『文芸博物誌』『琉球民俗誌』『形質人類誌』『孤燈の夢』『長屋大学』『台湾考古誌』（共著）、『木馬と石牛』『発掘から推理する』など。

南の風——創作集

1980年6月1日 初版第1刷発行

著者 © 金 関 丈 夫

発行所 財団 法政大学出版局
法人

東京都港区南麻布2-8-4

振替 東京6-95814 電話(03)453-0717

印刷／三和印刷 製本／鈴木製本所

1095-90061-7710

南の風／目次

I 詩集 1

II 俳句 45

III 小説 51

四十度の世界 52

深夜の客 58

呉れ好き貫い好き 67

利休と太閤 75

くびの輪 101

戎三郎 115

IV 戯曲 131

林秀琴の裁判 132

V 龍山寺の曹老人 153

龍山寺の曹老人 154

許夫人の金環 154

入船莊事件 163

幽霊屋敷 180

謎の男 203

観音利生記 228

D U 14放棄顛末 244

Ⅵ 南 風 275

南 風 276

台灣時代の金閨先生——工藤好美 403

底流する文学の香氣——劉 寒吉 406

知的世界のアラベスク——原田種夫 409

朝日賞受賞のころ——佐藤勝彦 412

あとがき 416

初出發表覚え書 418

I

詩集

なつみ

吉野なる

なつみの川に菜摘みせん
まづはほとりに庵りせん
さて 冬されば宮滝の
氷柱はとりて心冷やさん
ちいと浮世に
わしゃほれすぎた

雨

この雨や

春のことぶれ

珠つづり

花の芽ごもり

うすべによ

むらさきよ

枝つたい

もののながるゝ

色なくぞ

もののながるゝ

夜

きだはしや

おつるかがり火

さくら花

怪鳥^けなく

やみの奥ゆき

冬庭

雲やみしか

岩なる鵲鴒

冷えこもる

笹が根の空の眼

去年は来し

かの

葛城女

雪

雪ふり

梨畑

いかるがの――

おもて出て見よ

――堂のくりや女め

狐

さきなるは

突きわな

とび越えよ

溝はあり

水のむな

おくれやせん

露ふかし

茅の穂にたわむるな

尾につづけただ

耳黒

仔ら

八島路

八島路を

桃の花

つくしろは 籠こには盛れ

たけなが子

たぐさにはすな その 白き籠ら

長崎

三月

桃の花が
港の中を
はいってくる

朝露

ひとの声

—— オキヨシヤン
オハッチヤン
艫のおと

もやのおもてを

桃の花が ゆれてくる

大きい

紅い 花のかたまり

三月

どこかの浦で花火があがる

貝の歌

永良部なる

あぜふの磯のねじまがき

耳にあて

中なる風の音はきけ

やよ

おとめ 浜なる子

絶えたりや

海の歌

かげる日に

市原の

丘べの草よ

くらまなる 日蔭の森よ

谷ぐくよ

われは恋ほしも

岩魚とる

八瀬男^おが足のあかがり

岩がによ

虫くづよ

いつか見ん

大原なる

しらべの川よ

かげる日の

寂光院の柴の門^とよ

尼ごぜ

桶たもれ

阿迦くみてまいらせん

灯^はかげなる

菩薩らよ

金色よ

璽珞よ

たちのぼり たゆたいて

きらめく星よ

遠き世の邪惡のひとの

想い出よ

ああ われは

むかし見しなり

大原なる

おぼろの清水

年たけて

おぼろおぼろに恋ふるなり

市原の

丘べの花よ

鞍馬なる

ひかげの森よ 大原野よ

こころ憂えて

日ぐらし

さまよえる日よ

年たけて

今日もさまよう

ありし日のごと

深夜の客

深夜

客に対す

主客 声なし

主客 声なくして相対す

既に幾時

時にきく

屋梁 鳴ること 軋々

——屋上 雪 重からんとす——

言わんと欲して 声 またやむ

客 双耳を収めて

色 また促さず

深夜

客に対して 主客 声なし

声なくて相い対するに

知らず 夜気の尽くる時を

忽ちにして

鼠族 相い率いて来り

燭を顧みずして 客の膝にのぼる

客 双眼視ず

色 また動かず

時に風なくして 燭火 明滅し

梁上 鬼哭 声遠ざかる

再視すれば 前面 鼠影またなく